



## 20周年を迎えた環境科学部



環境科学部長／環境科学研究科長

増田 佳昭

本学の開学は1995年4月であったので、2015年は本学開学20周年にあたり、6月6日を中心に記念行事が行われた。全学の取り組みと平行して、環境科学部でも記念事業を実施した。環境科学部では記念事業の実行委員会を設置して事業企画について種々検討したが、最終的には、学部独自の記念出版事業、卒業生を迎えてのホームカミングパーティー、そして同窓会(湖風会)環境科学部支部の設立を中心に実施することになった。

まず、記念出版である。2000年11月から2010年5月まで、約10年間にわたって、環境科学部の教員、大学院生を中心に、中日新聞滋賀版に「琵琶湖と環境」と題する連載が行われた。開設20周年を機会に、これをとりまとめて1冊の書籍にしようというのが、記念出版の企画であった。『琵琶湖と環境—未来につなぐ自然と人との共生』と題された本書は、日頃からお世話になっているサンライズ出版から出版された。編集作業のために編集委員会が組織されたが、その代表者は新聞連載の世話役をしてくれた秋山道雄教授が、事務局の中心的な役割は籠谷泰行助教が担ってくれた。連載されたコラムは全部で430編、執筆者数は74名に上った。時間に制約がある中で、膨大な作業に対処していただいた両先生はじめ編集委員会の方々、米野陽子さんには改めて感謝申し上げたい。

本書の取り上げる問題は幅広い。琵琶湖の自然、琵琶湖周辺の生き物、琵琶湖と森林、琵琶湖とくらし、琵琶湖と生業、琵琶湖の環境問題、琵琶湖をめぐる人々の活動、といった具合である。環境科学の拡がりそれぞれの問題の深さといったものを感じさせる内容である。環境科学部が歩んだ研究と教育の足跡として大事にしたい財産である。

卒業生を迎えてのホームカミングパーティー(焼き肉パーティー)は、開学記念日の6月6日午後に圃場実験施設の広場で行われた。これまで学部単位でのこうした取り組みは行われてこなかったが、主催者側の予想を上回る100名以上の参加を得て、盛大に開催された。坂本充初代学部長はじめ名誉教授の先生方も来場され、一言ずつご挨拶をいただいた。環境科学部らしいアットホームな交流が出来たのではないだろうか。

同窓会環境科学部支部についてである。本学の同窓会「湖風会」は1997年に設立され、2006年に県立短期大学の同窓会と統合されて今日に至っている。湖風会会則によれば、学部ごとに「支部」を設置することになっているが、工学部支部が設立されて活発に活動し、人間文化学部が設立準備をする中で、環境科学部支部は設立されていなかった。そこで、20周年を契機に、県立大学環境科学部4学科(以前は3学科2専攻)と県立短期大学の関係学科等の卒業生をもって、環境科学部支部の設立を行った。その活動内容については、今後の役員会等で決められるが、環境科学部単位の同窓会設立の意義は大きく、各学科同窓会活動の活性化とともに、今後の活動を期待したい。

しかし、20年が経過したということは、良いことばかりではない。その例が大学の建物や設備の老朽化である。建物は時間の経過とともに「風格」を増すものもあるが、場合によっては「風化」する。「風化」には至らないにしても、経年劣化は避けられない。環境科学部でも建物の各処に雨漏りが生じて、修繕を繰り返さざるを得ない状況である。また、実験室の床も床材がはがれて危険な箇所が目立つようになって、順次補修を行っているところである。設備にも課題がある。今ではトイレのセンサーライトや自動水栓、さらには温水便座などは広く普及している。私学はもちろんのこと、国公立大学でもだいぶ普及してきた。本学では、その改善もなかなか進まないのが現実だ。さらに、実験設備なども開学時に導入したものを、だましだまし使っているケースが少なくない。

やはり、時間の経過には逆らえないのであって、大学の施設設備については、計画的なりニューアルが必要だろう。また、環境科学部は日本で最初の「環境」の名を冠した学部として設立されて、その先進性は評価されるべきであるが、20年過ぎた今日、その位置と役割、方向性が時代遅れになっていないか、検証していくことも大事であろう。今年度は、研究費をめぐる不祥事の発生も残念なことであった。次の20年に向けて、環境科学部がさらに魅力的な学部となれるよう関係者のさらなる努力が期待される場所である。